

157

<sup>7</sup> 記事を除外した基準は以下の通り。①データベースに対する利用許諾が得られておらず、掲載されていないもの ②海外の事例 ③「ままごと」という言葉を比喩として用いているもの ④芸能人や死者の生きたまごごとが出てくるもの ⑤「ままごと」という単語は出てくるものの、子どものままごと遊びとは関係のないもの ⑥「ままごと」が固有名詞として扱われているもの（例：劇団名） ⑦ままごと道具の出土の情報、過去のおもちゃを扱う展覧会の案内など、記事が掲載された時点以前のおもちゃを扱うもの ⑧本、イベント、場所の宣伝をしているもの ⑨創作物の題材である場合、子どもの遊びの様子が分析できないもの ⑩本文中でままごとに関する言及が少ないもの ⑪ままごとが女らしさの象徴として扱われているもの ⑫ままごとの道具は出てくるが、明らかに食事関係の道具ではないことがわかるもの（例：人形の服、布団）。

<sup>8</sup> このことには、「ヨミダス歴史館」の明治・大正・昭和版では全文検索ができないため、全文検索ができる平成・令和版に比べて検索された記事数が少ないことも少なからず影響していると考えられる。

<sup>9</sup> 仙田満（2009）こどものあそび環境。鹿島出版会

<sup>10</sup> 白井信（1996）デザインが幼児玩具に与える意味。文化女子大学紀要 服装学・生活造形学研究（27）、139-148

<sup>11</sup> 日本玩具博物館（監修）・尾崎織女（2014）ままごと。文溪堂

<sup>12</sup> 1895（明治28）年と1906（明治39）年の記事からも、子どもが自然の素材を使ってままごと遊びをしている様子うかがい知ることができる（読売新聞「ママゴト遊びに400円もする松葉蘭を使われて慨嘆／東京・本所区」1895年9月19日、朝刊3面／読売新聞「（ハガキ集）可愛くて叱れず▽観兵式での国辱的マナー▽お房の贈り物▽恋より自立を」1906年5月13日、朝刊8面）。これらの記事からは、明治時代にままごとをする子どもにとって、自然の素材は身近なものであったことがうかがえる。しかし、明治時代と戦後の時代では、子どもを取り巻く環境は大きく異なっていると考えられるため、この部分以降の考察には含めない。

<sup>13</sup> 2004年の投書は、読売新聞「（ぶらざ）来年もみんなで木の実拾いを」2004年11月10日、東京朝刊、生活A、17面、2006年の投書は、読売新聞「（日曜の広場）贈り物 ドングリで遊ぶ 主婦・鎌田孝美61（埼玉県所沢市）」2006年12月24日、東京朝刊、気流、13面。

<sup>14</sup> 前掲（9）、193

<sup>15</sup> 小針誠（2007）教育と子どもの社会史。粹出版社、190

<sup>16</sup> 紙製のものについては、以下の2つの記事が参考になる。読売新聞「リサイクル作品展、25日まで／東京・目黒」1998年10月20日、東京朝刊、都民、30面／読売新聞「手作り段ボール家具あすから東京・西新宿で展覧会」2006年12月6日、東京朝刊、生活B、14面。

<sup>17</sup> 大人側の、おもちゃを使って子どもに教育を行おうという意識は、1922年と1960年の記事からもうかがえる。1922年の「（婦人付録）（玩具研究）= 2（連載）」（8月21日、朝刊4面）では「美質を助長して缺陷を補ふには叱り飛ばすよりも、玩具の助けを借つて徐々に補ふことが却つて効果のあるものである」とあるほか、1960年の「新しい遊び道具『ママゴト』や折りたたみブランコ」（9月13日、朝刊9面）では、ままごと用のおもちゃに関して「合成樹脂でつくられたものの中にもおしぼりつきのものも登場しています。遊びの中で衛生観念を植えつけようというネライです」とある。しかし、これらの記事にみられるのはおもちゃを通して具体的な子どもの成長を促そうとする意識であり、2000年代以降にみられるような、漠然とした知育という意識や木材の利用を促進させようとする大人本位の意識とは異なると考えられるため、この部分以降の考察には含めていない。

<sup>18</sup> 斎藤良輔（編）（1985）明治・大正・昭和 子ども遊び年表。高橋洋二（編）別冊太陽（49）。平凡社、131-142

れつつある現状への危機感も語られるようになるとともに、脱プラスチック・手作り志向のおもちゃが多く紹介されるようになる。そして、安心・安全であり、まるで自然をモノとして与えるかのような、木製のおもちゃに対する注目が集まってくる。特に2000年代後半から現在にかけては、木製のままごと用おもちゃを中心に、知育玩具として子どもを教育しようとする大人の目的意識や、木材の利用を促進しようという目的意識等が込められてきていることがうかがえた。このように、子どもの遊び環境の変化とともに、食材おもちゃ以外のままごと用のおもちゃや、それらについての語られ方は変化してきた。

こうした変化を踏まえると、食材おもちゃは社会の中でどのように意味づけられていたと考えられるのだろうか。既製品に対する問題意識が語られ、自然が豊かであった過去を懐かしむ時勢の中でも、食材おもちゃは存在し続けていた。さらに、社会の中で脱プラスチック・手作り志向の流れが起きる中でも、布製や木製の素材のものが登場するとともに、手作りもされ、作り続けられていたことが明らかになった。こうしたことを踏まえると、食材おもちゃが作り続けられた背景には、子どもがままごと遊びをする場所が室内に移ってきたことをうけ、ままごと遊びのごちそうとしての物を必要とする子どもにおもちゃを与えたい、と思う大人の意識があった可能性が示唆されるとともに、大衆レベルでは、食材おもちゃは子どもの遊びにとって意味のあるものだという認識があったことが示唆される。また本研究では、食材おもちゃに込められている大人の教育的意図については、新聞紙面上には関連する記事が少なく、分析に至らなかった。この点からは、一般大衆社会における食材おもちゃは、人々から教育的な関心が寄せられる対象ではないまま、作り続けられていたということが推測されるだろう。

そして、2000年代後半以降には、食材おもちゃをインテリアに適したものと捉えたり、木材の利用を促進させるもののひとつとして捉えたりするなど、真に子どものためというものではない捉え方が生まれている。子どものおもちゃは、あくまで子どものためのものである。子どものためのおもちゃにとって、本当に必要な要素とは何なのかを、我々大人が意識的に考えていく必要があるのではないだろうか。

<sup>1</sup> 兼信英子・森智子 (1992) ままごとの研究. 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 41. 149-164

<sup>2</sup> 塚田愛可・酒井正幸・小宮加容子・太田晶子 (2011) 子育て支援ツールの研究: 新しいままごと道具の提案. 日本デザイン学会研究発表大会概要集, 58(0), 207-207

<sup>3</sup> 坂本渉 (2013) 幼児の「ままごと遊び」における環境構成についての一考察. プール学院大学研究紀要, 54. 261-274

<sup>4</sup> 多田敏捷 (編) (1992) おもちゃ博物館⑧ 女の子の玩具. 京都書院. 45

<sup>5</sup> 高橋洋二 (編) (1985) 別冊太陽 (49). 平凡社. 72

<sup>6</sup> 高山英男 (監修) 財団法人日本玩具文化財団 (編) (2000) 20世紀おもちゃ博物館. 同文書院.

西部朝刊, 西女性, 27面) という記事でも、木製の食材おもちゃは「出産や誕生日のお祝いに、安心・安全な贈り物として注文する人も多く」と紹介されている。

2000年代後半以降の木製の食材おもちゃに関する記事からは、食材おもちゃに大人の目的が込められているということがうかがえる。2007年の「(すたいる) 子ども雑貨 ポップでモダン、大人も夢中」(8月23日, 大阪朝刊, 生活B, 18面) では「ドイツ製のおままごとセットの野菜や果物、飲み物(1個357円〜)は温かみのある木製で、『インテリア雑貨としてもおしゃれ』と好評」と記載されており、子ども向けに作られた海外製のおもちゃを、大人がインテリアとして求めていることがわかる。また2011年の「(えいねえ土佐人) おもちゃ素材地域PR 荻野和徳さん38=高知」(5月30日, 大阪朝刊, 高知, 30面) という、高知県産の地元材で作られた食材おもちゃについて紹介する記事では、木工所の代表者が「おもちゃに着目したのは、木材を有効利用するにはちょうどいい大きさだから」と語っている。

こうして見てきたことからわかるように、食材おもちゃにおいても、ままごと用のおもちゃと同じように、脱プラスチックと手作り志向が進んだ。そして、大人の目的が込められる対象へと変化してきていることがわかる。

#### 4. 結語・今後の課題

本研究は、新聞記事に現れるモノやおもちゃ、子どもの遊びの様子、子どもを取り巻く環境等について分析することにより、これまでの食材おもちゃが大衆レベルでどのように捉えられてきたのかを考察するとともに、食材おもちゃが今日まで存在している背景を探ることを目的とした。

まず、戦後日本社会における子どもを取り巻く環境の変化と、それに伴うままごと用のおもちゃの変化について述べる。戦前から戦後にかけては、ままごと遊びは主に屋外でなされる遊びであった。子どもたちは道など屋外でままごと遊びをし、時には火を使うことまでであった。しかし、高度経済成長期に起きた社会の変容は、子どもの遊び環境やままごと用のおもちゃに大きな影響を与え、それに伴いままごと用のおもちゃの語られ方も変化していく。1950年には国産プラスチック製おもちゃの製造が開始され、1961年には輸出玩具産業面で日本が世界第1位になる<sup>18</sup>ほどおもちゃが大量に生産されるようになったことの反動であろうか、1960年代後半からは既製品のおもちゃそのもの、特にプラスチック製のおもちゃに対する問題意識が社会に生じてきていた。この頃の新聞記事では、既製のおもちゃへの諦めが語られる。そしてその一方、都市化や工業化が目まぐるしく進む中では、昔ながらの自然の素材を用いたままごと遊びや屋外でのままごと遊びが、紙面上にたびたび取り上げられるようになる。さらに1990年代からは、子どもの遊び環境から自然が失わ

日、市立宮津幼稚園に寄贈した。子どもの頃から木に親しんでもらう『木育』の一環で、今年度は、与謝野町と京丹後市のこども園の2か所にも贈る計画だ」と記され、木育の一環として子どもに木製の遊具を贈るといった目的がはっきりと記載されている。

このように、特に2000年代後半から現在にかけては、子どもが遊びで使うためのものであるおもちゃに、大人の視点に立った目的が込められているということがあるのではないだろうか。

## (2) 食材おもちゃに関する新聞記事の変化

本項では、「食材おもちゃ」のカテゴリーに分類された記事を抜粋して概観する。読売新聞の記事にて食材おもちゃが紹介されたのは1960年のことであった。1960年の紙面「幼児の“ゴッコ遊び”に フロ道具や料理セット」(11月28日、朝刊9面)では「幼児のママゴト遊びの道具も近ごろはおとなの生活の縮小版とでもいいくらいほど、よく作られたものが売り出されています。なかでも“ゴッコ遊び”といわれる八百屋、魚屋、菓子屋の商品をそっくりうつしてこしらえたものなどは五〜六歳の女兒にたいへんなうけ方」と紹介され、ボール紙でできたバター箱、マヨネーズのビン、プラスチックでできた大根と人参等のおもちゃについて記載されている。

そして、1980年代後半からは、布製や木製・手作りの食材おもちゃが多く現れてくるようになる。1988年の「(見る・聴く・遊ぶ) お正月特集 『グッチョンパ おえかきうた(1)』ほか」(12月30日、東京朝刊、婦人B、14面)では、ケーキ・カップ・ナイフ・スプーンなどが全て木製のケーキセットが「ままごと遊びの道具として安心して与えられる」と紹介された。1991年の「神戸で手づくり絵本展 工夫こらした楽しい作品ずらり」(7月28日、大阪朝刊、生活、12面)には、主婦グループが手作り絵本として作った「布製の安全なままごとセット」が、オムレツや目玉焼きを作って遊ぶことができるものとして記されている。2010年の「(ほのほの@タウン) 10月8日=秋田」(10月8日、東京朝刊、秋田2、24面)には、女性が手作りしたという食材おもちゃについて記載され、「キルトのままごとセットには、コーヒーカップやショートケーキ、刺し身やイクラまで作り込んだ本物そっくりな寿司弁当」とある。ちなみにこのおもちゃは、同記事によると「3歳の孫娘がお気に入り」ということだ。2014年には、「木の『ままごと玩具』人気 神戸・ディンギー=兵庫」(1月29日、大阪朝刊、神明2、26面)という記事が掲載され、「木のぬくもりを生かした子ども用の『ままごと玩具』が人気を集めている」「精緻な細工で野菜や果物を表現」「安全性にも配慮」と、木製の食材おもちゃについて紹介された。2016年の「(いいもの見つけた) 木製、無塗装 遊んで安心」(10月23日、

側までサンドペーパーで手仕上げした丁寧な仕上がりで、小さな子どもにも安心だと木製のままごとセットが紹介されている。

こうした記事からは、1990年代から現在にかけては、プラスチック以外の素材を用いた手作り感のあるおもちゃが注目されていたことがわかる。これは、プラスチック製を中心とする既製品のおもちゃに対して、人々が抱いた問題意識の裏返し、とも言えるだろう。また、特に木製のおもちゃについては、子どもの遊び環境として失われてゆく自然を、おもちゃに託したという見方もできるかもしれない。

### 5) おもちゃに込められる大人の目的 (2000年代後半～現在)

2000年代後半から現在にかけては、大人がままごと用のおもちゃに、何らかの目的を込めていることがはっきりとうかがえる記事がみられる<sup>17</sup>。

まず、2000年代後半からは、大人がままごと用のおもちゃに対して、漠然とした教育意識を含ませようとしている様子が見られた。2006年の「(百貨店大研究)おもちゃ売場多様化 知育玩具花盛り 大人向けも充実」(9月8日、大阪夕刊、デパ、3面)という記事では、「子どもの知性や感性を高める『知育玩具(がんど)』」について記されている。「少子化の影響で、玩具市場は縮小しつつある。(中略)だが、少なくなった子どもに寄せる親や祖父母の期待は高まるばかり。知育玩具は、そうした顧客の関心を引きつけるのに有効なようだ」とある。そして、記事の後半では、百貨店で販売されているお薦めのおもちゃのひとつとして、「木製ままごとティーセット(1155円)」が記され、その説明として「樹液を採取した後のゴムの木を使ったエコロジーおもちゃ。木の温(ぬく)もりが伝わります」とあり、ままごと用のおもちゃも知育玩具として紹介されている。ままごと用のおもちゃに、漠然と知育という目的が込められた、という点は非常に注目に値する。

そして、特に木製のおもちゃや遊具については、木材の利用を促進させようとする大人の意図が込められている様子が確認された。2015年の「自然活用の取り組み 視察 経産副大臣 四万十町の集成材工場など=高知」(3月4日、大阪朝刊、高知、31面)という記事では「副大臣は、いす用に曲げて加工した集成材や、木の温かみを生かした、ままごとの玩具を手に取り、技術力の高さに感心し、『十分ビジネスになると思う。さらなる発展に向けて、支援させていただきたい』と述べた」と記載され、ままごと用のおもちゃは、町内の木材を活用するための対象として考えられていることがわかる。この記事のように、子ども向けに木製のままごと用の遊具を贈る動きは、2018年の「木製ままごとハウス贈る 宮津高生製作 幼稚園に=京都」(9月19日、大阪朝刊、セ京都、29面)という記事にも現れている。「宮津市の府立宮津高校建築科の3年生が地元産ヒノキで室内用『ままごとハウス』を製作し、18

ここで紹介したような記事が新聞に掲載されることには様々な要因が考えられるが、そのひとつとして、自然が減少していく現在の世の中と、かつて自分が子ども時代を過ごした頃を比較するような意識が社会の中にあった可能性がある。これは、小針が述べているような、高度経済成長の終焉に伴い「これまでの社会のあり方が批判的に問い直されるようになった」<sup>15</sup>ということのひとつの表れかもしれない。既製のおもちゃに対する問題意識が沸き起こった後には、かつての豊かな自然環境を懐かしむだけではなく、時には現状の自然の少なさに対して危機感すら抱くような状況があったことが推察される。

#### 4) 脱プラスチックと手作り志向 (1990年頃～現在)

1990年頃からは、手作りのおもちゃに関する記事や、プラスチックではない素材を用いたままごと用のおもちゃや遊具を紹介する記事がみられるようになる。

プラスチックではない素材で作られたままごと用のおもちゃや遊具として記事になっているものには、牛乳パックや段ボールなどの紙製のもの、フェルトなどの布製のもの、木製のものの3つがあるが、ここでは字数の関係で、布製のものと木製のものについて考察する<sup>16</sup>。

布製のものについては、2006年に「中学生の創造力豊かな150点 ものづくり教育フェア展 佐賀市立図書館＝佐賀」(12月24日、西部朝刊、佐賀、28面)という記事において、教育フェア展では中学生がフェルトで作ったままごとと道具が展示されている、と記されている。そして、2008年の「(ほのほの@タウン) 9月3日＝富山」(9月3日、東京朝刊、富山2、30面)では「年に二、三回、会員や家族が集まって、ブックカバーや壁掛け、ままごと遊びの道具などを作る『チクチク教室』を開く」という、心臓病者友の会(心友会)の活動が紹介されている。こうした記事からは、既製のおもちゃを買わずとも、おもちゃは自分たちで手作りすることができる、という人々の意識が感じられる。

木製のものに関しては、2005年に「(紀州・人紀行) 手作りグループ代表 和田聡江さん40＝和歌山」(9月11日、大阪朝刊、和セ2、32面)という記事内で、木工で作る手作り品について、和田さんが「依頼されて作ることも多いですね。『ままごとキッチン』とあって、蛇口やコンロの付いた小さな流し台も今、何件か注文を受けています」、また、「魅力は何と言っても木の持つぬくもり」とも語っている。そして2013年には「(納得セレクション) イヤーフォース ジュエリー、無垢材のままごとセット」(5月21日、東京夕刊、シテB、8面)という名の記事にて、「ぬくもりのままごとセット」として「無塗装、無着色のブナ無垢材で作られた丸みのあるかわいらしい形。木ならではのぬくもりがあり、手にしっくりなじむ。器の内



おさかなをやいていて 大声で「あら おさかなが こげちゃった」とっても  
楽しそうだ (埼玉・浦和・文蔵小三年)

この詩においては、詩を書いた子どもの妹が、砂や水・葉を食べ物に見立てて遊んでいる姿が詳しく表現されている。2000年の「(気流) 優しさ失わず育ってほしい 主婦・中根早苗32 (鳥取県米子市)」(4月25日, 大阪朝刊, 気流, 18面)でも「道端にはタンポポやレンゲといった春の草花が咲き乱れ、子供たちは花摘みに夢中だ。摘んで帰った花は、おままごとに使うなどして一生懸命に遊んでいる」と、投書した主婦が子どもの様子を記していたり、2004年と2006年にも、子どもがどんぐりをままごとに使っているとの投書があったりする<sup>13</sup>など、子どもが既製のおもちゃではなく、自然の素材を使ってままごと遊びをする様子が紙面上に掲載される。こうしたことから、既製のものが豊富になった1970年代以降であっても、まだまだ子どもは自然の素材を使ってままごとをしていたことがわかる。そしてこうした記事は、子どもの姿を見守る大人のあたたかな眼差しすら感じさせる。

さらに、1990年頃から現在にかけては、かつて子どもであった頃のままごと遊びを回想して書かれた記事が掲載されるようになる。例えば、「(日曜の広場) 庭 洗濯物がネット 主婦・吉野えいこ44=埼玉県北埼玉群」(1998年3月29日, 東京朝刊, 気流, 13面)では、「子供のころ、庭にゴザを敷き、友達とよくままごとをした。ツゲの実、ツバキのつぼみなどがごちそうだった」と記される。本件に関連してはさらに、自らが子ども時代を過ごした頃の回想だけでなく、子どもを取り巻く現状の環境に対する危機感をつづるものがある。1992年の「(ティータイム) 自然と共生できる生活こそ」(2月2日, 大阪朝刊, 生活, 16面)では、「かつて子供たちは、戸外の遊びを通して自然と密接につながっていた」「深刻な自然環境の破壊は、子供たちを自然界から疎外し、子供本来のしなやかな心の働きさえ阻んでいる」と記されている。また、2000年の「(おらざ) 手作り笛よりゲーム機とは…」(7月1日, 東京朝刊, 生活A, 29面)では、「私の場合も、ままごとの食器は木の葉で、食べ物の花びらや木の実だった。レンゲの首飾りは最高にきれいだった。かくれんぼでは年上も年下も一緒になって遊んだ。どの遊びも今は懐かしい思い出となった」と女性が振り返っており、子どもの遊び相手の減少だけでなく、子どもの周りの自然環境の少なさについて心を痛めている様子が伝わる。仙田は、昭和30年代(1955～1964年)からの子どもの遊び環境について、「都市化が進み、空地がなくなり、川が汚染され、道路は自動車によって占領され、こどものあそび場は急速に失われ始めた」<sup>14</sup>と述べている。1990年代には、さらに子どもの遊び環境から自然が失われていたと推測できる。

山岡さんが以下のように語っている。

「(略) まだ、日本ではおもちゃに関しては、あきらめみたいなものがありまして」子供にとって遊びは生活そのもの。おもちゃは遊びに欠かせない道具。「でしょ。だから、いいもの選ぶことが大事なんです、これがむずかしくて……」。(中略) 戦中、戦後。花や葉っぱのおままごとで「結構楽しかった」。今、がん具はらん時代。「だからって、今の子も葉っぱで遊ばそうというのは非現実的です。(中略) ただ、長く遊べるいいものを、そして与え過ぎないよう心がけている」

この記事からは、1977年の時点で、日本社会ではおもちゃに対する諦めの念のようなものがあつたことや、質の高いおもちゃを選ぶことが難しかったこと、同時に多くの玩具が氾濫していたことがうかがえる。

また、子どもがおもちゃにすぐに飽きてしまうことに対する大人の苦勞や、良いおもちゃを選ぶ大人の責任についても、記事として掲載されている。1976年の「(生活のヒント) オモチャ▽豚マメ」(8月26日、朝刊13面)では「幼児は新しいオモチャをほしがりますが、買い与えてもすぐあきてしまうことがあり、そんなオモチャがいっぱいになってしまいます」と記されたほか、1997年の「おもちゃ選びに大人の視点大切 自分で使って魅力を確認 サイクル短い流行品」(12月10日、東京朝刊、生活B、16面)では、「何が良質かを見極めるのは大人の責任のはず」と記されていた。

このように、1960年代後半～1970年代、2000年頃には、人々はおもちゃの安全性やその質に対して、問題意識を持っていたことがわかる。

### 3) 自然の素材を用いるままごと遊び (1970年代、2000年代～2010年代前半) / ままごと遊びの回想と現状への危機感 (1990年頃～現在)

先述したように、既製のおもちゃに対する疑問が社会に現れるのは1960年代後半からである。それとほぼ同時期の1970年代からは、子どもがどんぐり・砂・葉・花びらといった自然にある素材を用いてままごと遊びをする様子が紙面に登場するようになる<sup>12</sup>。例として、「(ままごと) 伊藤千恵子=子どもの詩」(1977年7月7日、朝刊13面)という、小学3年生の子どもが書いた詩を引用する。

ままごと 伊藤千恵子

妹がままごとをしている お茶わんの中に すなのごはん やかんの中には 水とすなを まぜて 麦茶にしている 木の えだを おはしにしている はっぱの



す とめ方も知らず運転／東京都墨田区」(4月17日、夕刊5面)という見出しで、「ロード・ローラー(六トン)が自宅の前で一人ママゴト遊びをしていた」女の子をひき殺したとある。また、1967年には「ままごとへバックの車 二つの誕生日、幼女死ぬ／墨田区」(7月11日、夕刊11面)という記事にて、「友達(三つ)と路上にムシロをしいてママゴト遊びをしていた」2歳の子どもが、バックしてきた車に轢かれて亡くなったと報道されている。仙田によれば、かつて自動車が都市に少なかった時代、道は都市の子どもたちにとって最大のあそび場であったという<sup>9</sup>。事故の背景には、当時のままごと遊びは屋外でなされることが一般的だった、ということがあろう。

以上2点から、かつて子どもは屋外でままごと遊びをしていたということと、かつての屋外でのままごと遊びは、事故がたびたび報道されるほど危険をはらむものであったという点で、現在のままごと遊びとは異なっていたということがわかる。

## 2) 既製のおもちゃへの問題意識(1960年代後半～1970年代、2000年頃)

1960年代後半から1970年代にかけて、また2000年頃には、新聞紙面上で既製のおもちゃに対する問題意識が語られる。

問題意識の中には、まず既製のおもちゃの安全性に対するものがあった。1967年の「主婦手帳 ポリ容器の利用法」(4月11日、朝刊8面)という記事では、福島県の主婦が「中性洗剤、シャンプーなどのあきポリ容器の口を大きく切ります。切り方により、コップや茶わん、サラになり、既製のママゴト道具より、はるかにじょうぶで安心です」と記事を寄せていた。それだけ当時の既製品が粗悪な出来であったということだろう。そして1971年の「おもちゃ実験室 ごっこ遊び 避けたい割れもの」(1月28日、朝刊19面)という記事では、「プラスチック製が一番安全だ、と思いがちでしょう。それが必ずしもそうではないのです。薄くて硬質のものは、鋭く割れて大変危険なものもあります。本物のプラスチック食器のように、厚手で弾力性のあるものが望ましいのですが、まだ出回っていないようです」として、プラスチックだから安全というわけではない、と記している。白井によれば、国産プラスチック製おもちゃの製造が開始されたのは1950年のことであり、食器・まな板・包丁といったごっこ遊びの道具にもプラスチックが台頭していった<sup>10</sup>そうだが、その当時のプラスチックは「燃えない・さびない・壊れない」素材として歓迎されていた<sup>11</sup>そうだが、上記の新聞記事が掲載された1960年代後半には、むしろ批判的に捉えられるものになっていたようである。

そして、既製のおもちゃの現状については、1977年の「(人&人)日本では珍しいおもちゃコンサルタント1年目の山岡靖子さん」(11月25日、朝刊21面)にて、

のである。図2からは、1890年代から1950年代前半にかけては非常に記事が少なく、1990年代以降に記事の大部分が存在していることがわかる<sup>8</sup>。このように、年代により記事数にばらつきがあるものの、本研究においては記事がその年代に1つでも存在するということを重視し、記事の数にかかわらず考察していくこととする。

本節第1項では、分析に使用する7つのカテゴリーのうち、「食材おもちゃ」以外の6つのカテゴリーについて時代ごとの変遷を追う。そして第2項では、前項にて明らかになったことを踏まえ、「食材おもちゃ」カテゴリーの記事の変化を追う。

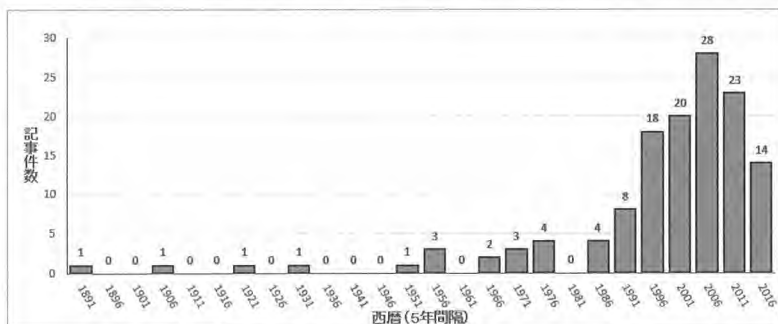


図2 分析対象としたカテゴリー内に存在する記事の年代分布

(1) 子どもの遊び環境とままごと用おもちゃに関する新聞記事の変化

1) 屋外のままごと遊びと事故 (1931年、1954年、1957年、1967年)

1931年、1950年代、1967年には、ままごとをしていた子どもが死亡するという痛ましい事故・事件が報道された。それらは事故の形態により2つに大別される。

1つ目は、子どもが火傷を負い亡くなる事故である。1931年8月30日の「(よみうり少年新聞) あぶないマ、ゴト 火をもて遊んで少女焼け死ぬ」という記事では、川べりで遊んでいた子どもが「側に置き放してあつた土砂運搬用のトラックを見つけたので、二人はその中でま、ごと遊びをしようとする玩具をか、えてトラックにもぐりこみ、玩具の釜の下に新聞紙やボロをねじ込んで火をつけたところ、折柄の烈風に火はあふられ、あなやといふ間もなくさえ子の着物にもえ移り、生不動となつてその場に倒れた」という悲惨な状況が記された。1954年には「開かなかった箱の中 幼児二人が焼死 ママゴトのマッチ燃え広がる」(7月19日、朝刊7面)という記事が掲載され、「クズ箱に入ってママゴト遊びをしていた幼児二人が、持ちこんだマッチのいたずらからついに二人とも焼死した事件が起きた」と報道されている。

2つ目は、車による事故である。1957年には、「ロード・ローラー 幼女をひき殺

おもちゃ<sup>6</sup>などがある。こうしたことから筆者は、食材おもちゃがこれまでの社会の中でどのようなものとして捉えられていたのか、そしてなぜ長期間にわたって作り続けられてきたのかを問う視点が必要であると考え、食材おもちゃに関して、そうした問いに基づく研究はなされていない。

そこで本研究では、大衆レベルでの食材おもちゃに関する意識を探るため、新聞記事を分析の対象とした。そして、記事に現れるモノやおもちゃだけではなく、子どもの遊びの様子、子どもを取り巻く環境等を含めて分析し、人々の意識を探ることを試みる。そのことを通し、これまでの食材おもちゃが社会の中でどのように捉えられてきたのかを考察するとともに、食材おもちゃが今日まで存在している背景を探ることを目的とした。

## 2. 方法

読売新聞のデータベース「ヨミダス歴史館」に掲載されている記事を対象に、「ままごと」というキーワードで検索を行った。検索語としてままごとを用いたのは、食材おもちゃという言葉が一般的に使用されているものではなく、検索語としては使用できないため、別の検索語を用いる必要があったからである。検索の結果、明治・大正・昭和版では47件、平成・令和版では926件の記事が検索された（2019年5月8日現在）。そこから一定の基準<sup>7</sup>のもとで分析対象とする可能性がある記事を210件抽出した。

210件の記事は、KJ法を参考とし、1記事を1単位としてカテゴリー化を行った。その結果、「食材おもちゃ」「ままごと遊びの回想と現状への危機感」「既製のおもちゃへの問題意識」「屋外のみまごと遊びと事故」「自然の素材を用いるままごと遊び」「脱プラスチックと手作り志向」「おもちゃに込められる大人の目的」「子どもへの人気」「様々なままごと道具」「遊び場所」「ままごと遊びの教育性」「公共施設」「贈りもの」「ままごと遊びの変化」という14のカテゴリーが生成された。それらのカテゴリーの中から、おもちゃやモノと子どもとの関係を論じていない記事のカテゴリーや、あまり重要でない事柄に触れていたり、単純な説明で終わっている記事のカテゴリーは省き、7つのカテゴリー（「食材おもちゃ」「ままごと遊びの回想と現状への危機感」「既製のおもちゃへの問題意識」「屋外のみまごと遊びと事故」「自然の素材を用いるままごと遊び」「脱プラスチックと手作り志向」「おもちゃに込められる大人の目的」）を選択し、分析を行った。

## 3. 時代ごとの新聞記事の変化

図2は、分析に使用する7つのカテゴリーに存在する記事の年代分布を示したも

## 論文

## 日本社会における「食材おもちゃ」の意味づけ —子どもを取り巻く環境の変化とままごと用おもちゃの変化に着目して—

藤谷 未央\*

The meaning of “food toy” in Japanese society:  
Focusing on the changes of environment around children  
and the transition of toys for playing house

Mio FUJITANI

## 1. 問題と目的

幼稚園・保育所・認定こども園等において、ままごと遊びの環境設定として選択されるもののひとつに、図1にて示したような食材の形をしたおもちゃがある。本研究では、こうしたおもちゃを「食材おもちゃ」とし、お皿やお鍋、スプーンといったままごと用のおもちゃとは区別して扱うこととする。



図1 食材おもちゃの一例  
(筆者撮影)

子どもは様々なものを食材に見立ててままごと遊びをすることができるため、食材おもちゃはままごと遊びに必要な不可欠な存在とは言えない。さらに1990年代以降の先行研究においては、既製の食材おもちゃはその教育的意義が問われる対象となっている。兼信・森は、食材おもちゃでは子どもが遊びの中で創意工夫しながら想像力を働かせることができないと指摘する<sup>1</sup>。塚田らは、子育て支援のためのツールとして新しいままごと道具を提案するという立場から、子どもがままごと遊びによって「生活の知恵」「社会性」「想像性」を培うためには、具材は抽象的なものにしたほうがよいと述べている<sup>2</sup>。坂本は、保育現場の環境設定としての食材おもちゃは、見栄えはするものの、調理をする遊びに不向きであるということを指摘している<sup>3</sup>。

しかし一方で、日本の社会全体に視野を広げれば、食材おもちゃは子ども用のままごと遊びのおもちゃとして長きにわたって作られてきたものである。そうした過去の食材おもちゃの存在は、複数の書籍において写真の形で確認することができる。例えば、1910年代にままごとの食品として作られた、野菜や魚介類の形をしたおもちゃ<sup>4</sup>や、1955年から1964年の間に作られた、キャベツまたはレタスのような葉物野菜の形をしたおもちゃ<sup>5</sup>、1969年に売り出された、ソフトクリームや果物の形をした

\* (ふじたに みお) お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程